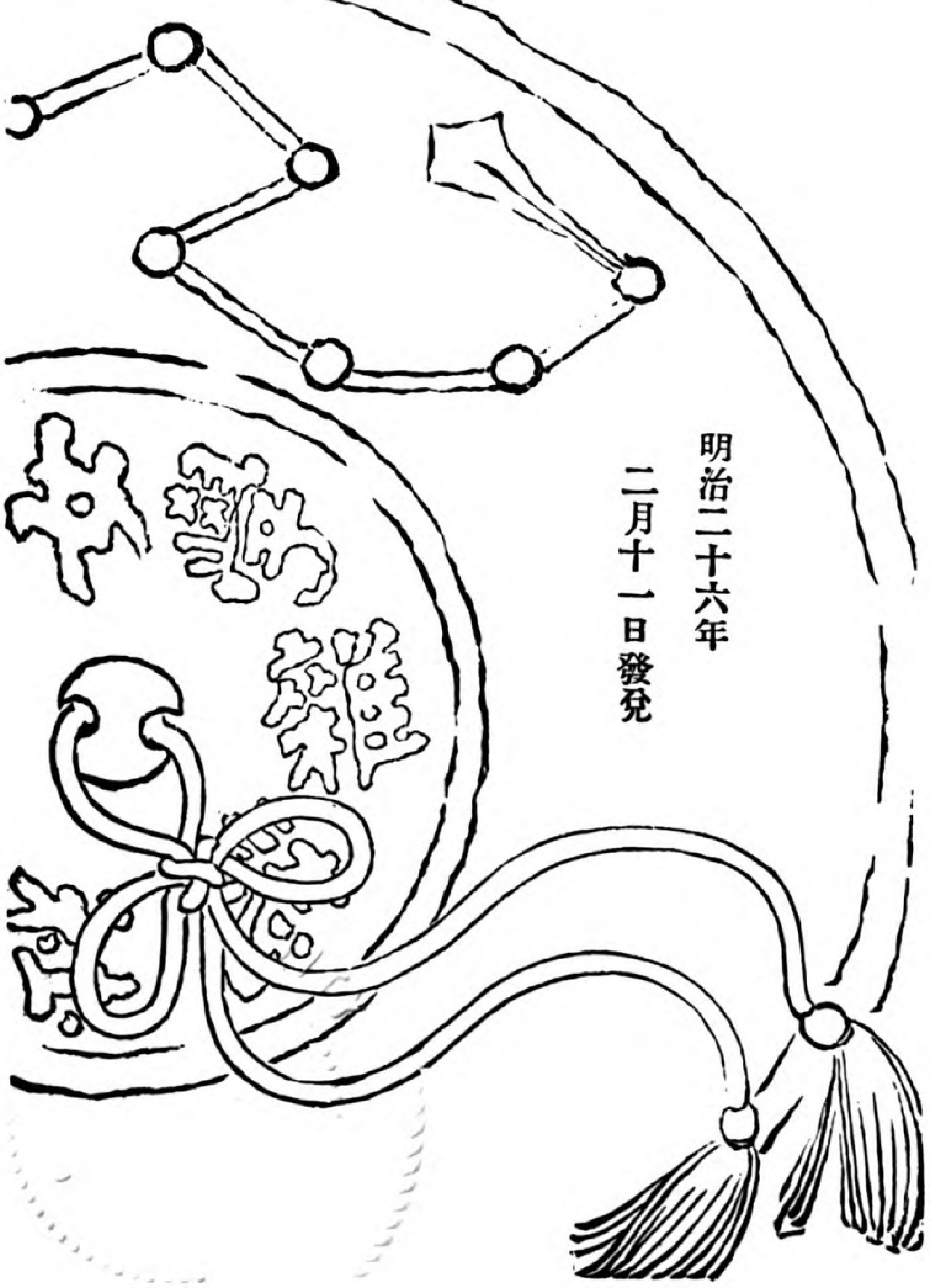
女學雜誌

第三百三拾八號

甲の巻



明治二十六年二月十一日發兌

注意

- 當世治安策　社説
- 當今基督教會の失策　社説
- 小説、ロウレンス　若松賤子
- 海石榴舍歌話　井上通泰
- 詩人、詩人　紫苑山人
- 與英人某書　櫻井明石
- 閑窓茶話　脱蟬子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 338. FEBRUARY 11th. 1893.

EDITORIAL:—A Plan Suggested for Securing Social Peace in the Country. A Mistake of the Christian Church.

NOVEL:—Laurence. (A Translation from the English Poem by Jean Ingelow).

OPEN LETTER:—To an English Gentleman about the Translation of a Novel.

MISCELLANEOUS:—"Fuji" from Mount Mitake. Reflections by an Quiet Window. Modern Poets. O Poet!

CRITICAL NOTES.

FRAGMENTS.

BIOGRAPHY:—Abraham.

本號（第三百三拾八號）目次

○社說　當世治安策○當今基督教會の失策
○小說　ローレンス（第一回の下）（若松賤子譯）
○開書　英人某に與ふるの書（櫻井明石）
○雜錄　御坂嶺の富士山（山月子）○閑窓茶話（脫蟬子）
○海石榴舍歌話（第一）井上通泰記（野矢常方の事）○詩人、詩人、（紫苑山人）
○史傳　アブラハム（土井久壽彥）
○批評　大和田氏の和文學史○風の糸目○小說花相撲
○新教育
○片々　拾數件

前週（第三百卅七號）赤表

○論說　婦人の大事業（松村介石）
○雜錄　ウエスト女史日本國觀察（上）。今昔物語（蜀山人の滑稽。臨終の用意。家康の注意。秀吉の慈仁。人を遣ふ人の心得）。神の兵（雲峯子）神の民（雲峯子）
○摘要　女子教育の妨害を排す。高等女子教育擴張案。孤女學院。○ウエスト女史演說一東。女教師女生徒の醜聞
○史傳　カノン、バットレル氏夫妻
○兒籃　我宿の花（若松しづ子）
○家政　鯛めし。えびめし。ぎうめし。ほしばめし。蠶豆の皮を脫く法。里芋ぼたもち。柚子餅。洋燈のホヤつぎ簡易法。ホヤの破裂を防ぐ法。器中の垢を去る法。衣類に赤土の付きたるを去る法。銅道具の垢を去る法。田家のこよみ
○開書　三宮義胤に送る（安枝武雄）
○通信　數件
○女報　數十件
○孤兒の友　孤女學院報告。北海孤兒院報告

前々週（第三百卅七號）白表

●社說　議會停會の飛報に接す
●論說　豪商界（下）商業の本道（天知子）
●史傳　日本の思想界に於ける情（下）櫻月子佛教傳來と其影響（跡雨散人）
●雜錄　雜感（一）亂暴過激に二種類あり（二）、知己と傳道（三）沈思瞑想（四）信仰より出る大勇（五）英雄の兩側面（六）人物の威嚴（七）パプテズマのヨハネ（山月子）三日の旅（花園女史）箕子を讀みて（韻文）○探幽の鳴立澤を見て（韻文）殘花道人○此世（紫苑山人）
●批評　デビニチー○天啓教と聖書○中等唱歌
●開書　閣龍世界博覽會の費用並に其財源
●寄書　臆病者の十難、勇者の十德（養素子）
●片々

女學雜誌 第三百卅八號 明治二十六年二月十一日發兌

社説

當世治安策

一 三田の老先生

三田の老先生、時務を論ずる毎に、名譽分配の議を主張す。名譽分配とは、之を官に偏せしめずして、之を民に分ち、之を政治界に限らずして、之を、商界、農界、學者仲間、其他百般の人の業務の中に汎ねくするを云ふ。蓋し、名聲の集權を解いて、之に分權を得せしむるの策なり。夫れ凡俗の情の譽を好むは、猫の木天蓼に於ける、狐の香鼠に於けるに異ならず。此時に當りて、官邊の政治界に、香鼠と木天蓼とを掛け天下に示す。天下の狐たり猫たるもの、安んぞ鼻を蠢めかし、足を揚げて、之に向つて狂奔せざるヿある可き。近年、世人、靡然として單に之に趨り、國家に政治あるを知りて、他に幾多の光榮ある人事の存するヿを知味するを得ざるもの、職として之に因由す。人才、皆な之に着眼して、政界の騷忙いよ〳〵烈し。如此くして止まずんば、何の日にか、邦家に安寧を見ん、如かず、名譽を八方に分配して、人心を十方に散引し、爭點を各所に擴げて以て人の雜然として混鬪するを防がんには、と。之を、俗情を知り凡識を悉したるコンモン、センスの大先覺が立策となす。若し、凡俗の情識を利導するヿに安んじ、人の尋常下根の需に應ずるを可なりとせば、吾黨は則はち此立策を以て當世第一の智策なりとせん。此策一と度び行はれば、他の百難截然として解除せらるゝことを得べし。

然れども、吾黨は、此世智に長じたる老策の到底の結果を知れり。庭園を造る人、石を此處より移して彼處に置く、風光稍や變じたるが如しと雖ども、石は頑然として長久に石なり。此石言ふにあらず、此石情けあるにあらず、彼は永久万々年に至るまで石なり。思ふに、凡俗の情識のみに應じて、立策するは、庭作りが、石を彼此に運轉するに異ならず。石の永遠に石たるが如く、俗人の俗情長久に俗々たるが故に、遂に以て美妙の世界を現出するヿ能はず。古の詩人、歌つて、天

下に日々新らしきとなしと云ふもの即はち是也。彼の骸骨を腰間に飾り、生歯を胸頭に列ねたる蠻人を以て、鹿鳴館に織々として舞蹈する可憐婦人に比ぶれば、文野の差別大方ならずとこそ思はるべけれ。左れど、其の俗情を對比し、其野心を合照するときは、「人」としての階級に於て、未だ幾千の懸隔を有せりとは見る可らざる也。此故に、年代の經行に、開化の二字を冒さしめ、交際頻繁の必要物に、文明と云へる美稱を冠らしめ、只だ外景の推移に隨應したる變化を以て進步なりと誤認せんほどの淺々しき人の心には、所云る世智に長じたる一時の融通策の外、別に妙方ありとも、思はれざるべし。否な假令ひ妙方ありとするも、そは是れ迂濶至極にして、當今繁劇の世に應用す可らずとこそ思はるべけれ。嗚呼、止みなん哉、此流一時の立策者と相爭ふと。抑も吾黨は一時の立策に寸効なしと云ふにあらず、一時の立策には一時の効ありと知る。但だ之れを以て長久に効あるものとなす可らずとは云ふ也。此故に、吾黨は、石を化して人と爲すの聖策を熱望す。人にあらずんば、人の事を爲す可らず。凡俗の情を以て、聖妙の事を爲さんとするは、盜賊を用ひて孔子の事業を爲さんとするに均し。松蔭曰く離人無事と。吾黨は、先づ、人を造らんとするもの也。

左れば、人世を眞に改革し、邦家を眞とに安寧ならしめんと欲するものは、彼の俗凡卑下のなみ〳〵の人の心を其儘に置かんとせず、先づ此心を改革し、此心改革して而して后ち其の成す所ろの事隨つて改まるとを望みとす可し。然らずして、心依然として舊の如く、俗氣依然として元の如くんば、人の事業たとひ一回轉じて其趣を異にすとも、其實到底亦た同じからざるとあるべきやは。濁源の流は、幾度びか其流を酌干すとも尙依然として濁流なり。

二　石を化して人と爲す

古の大預言者、敎ゆらく、神は石をも化して人となすと。吾黨は、此の聖策に則とらずんばある可らず。

香餌を一方に掛けずして、八方に分つ時は、一方に群集したるものゝ、八方に散ずべきは、勿論也。然れども、八方に散じたるが爲めに、狐は化して、人と爲りたるにはあらず。吾黨は、名譽分配の策のみを以て、滿足す可しとせず。

吾黨請ふ試みに人々に告げん。人々よ、同胞よ。公等は、何

事を以て、事業とし、何ものを以て、事業の大小を分つ乎。公等は蓋し樣々の答案を以て吾黨に報ゆるならん。吾黨畧ぼ之を察知せり。左れど、概するに其類通常の論定は、遂に空の空に歸するヿを悟了するヿを得べしと信ず。

人の事業とは、人の德性の結べる果なり。而して、此果の善し惡しは、他の人を益すると否とによりて善惡となり、其大小とは、益するヿの多きと少きとによりて別る。左れど、所云る、人を益するなるものに、意義あり。人の靈性を救ふものは、最大の益なり、人の肉身を利するに止まるものは、益の小なるもの也。古來の俊傑中、誰か、バプテスマのヨハ子に及ぶものあらんや。然れども、天國の赤兒は、尙ほ彼にすら、優るとせらる。世の所云る大事業なるものは、即はち吾黨の大事業なるものにあらざる也。人の靈性を救ひ、之に永遠の生命を與ふるの事にあらずんば、巨大なりと見る人の爲せし業も、必竟引結びたる原頭の草に異ならず、解くれば、元の野原也。

左れば、吾黨は、名譽を以て人を誘はざるべし。名譽元來惡物にあらず。世に誰か、名譽を好まざるものかあらん。もし名譽を嫌ふと云ふものあらば、之れ亦た一種の名譽を好むもの也。名譽必竟惡物にあらず、たゞ之を目的とするヿなかれとは云ふ。名は實の賓なり、譽れは德に伴隨すべきものなり、名譽は到底、人の美に伴ふべし、其伴ふを見て滿足するは、人の正當なる自然の情とす。吾黨は之を斥けざるもの也。ただ吾黨が斷々乎として擯斥する所のものは、名譽を目的とするの一事これ也、名譽に使役せらるゝの一事これ也、人にして、名譽に束縛せられ、名譽に制御せらるゝの一事これ也。左れば、吾黨は、名譽を以て人を誘はざるべし。

吾黨は、同胞に告ん。公等、須からく、人、世に存するの大目的を知るべし。而して、亦た、人の常に爲すべき義務、其の當に趣むくべき歸向を知るべし。斯て、其事業は、德の譽たり、其大小は、人を益するの多少にありと知るべし。

此に至りて考ふれば、人は皆な其長所に應じて、天の職あり、天の職を爲す所ろに於て、皆な各自の最大事業を爲すヿを得べき也。器に隨がひて用を爲し、量に應じて力を盡せば、則はちこれ其器量相應の大事業を成せし也。此事業に伴ひて、當然の譽れあり、譽れに應じて十分の報酬あり。此の當然十

分の處に安んじて、身を處すれば、人生の滿足之に過るものなし、社會に於ける安身立命の地すでに得られたり。

此故に、政界に譽あるが故に、之に趨り、商界に其譽の分れたるが故に亦た之に趨り、忙々騒々として、單だ譽にのみ趨ることをせば、人、世に生き存らへて假令ひ古に稀れなる長壽を得たりとするも、生を終るの事業は、赤兒が頑是なく母を喜ばす一喃々にすら如かじ。悲しき哉、如此き人。終身、世を走せめぐりて遂に「人」とならず。長壽を得て而も緑兒に及ばず。營々として、遂に何事をも成さず。

三　立脚の地何如ん

國會開くるに先だちて、不當の處望を之に掛けたる人は、今や大方迷ひの眼を開きたるらん。國會の實力なるものは、果して、幾干程ぞ。

もとより、今日の國會を見て、國會の能事之のみと言ふと勿れ。專制時代より立憲時代に移る。推移の間に當れる國會に過度の建設事業を求む可らず。國會もとより、万能力ある可らず、左れど、今日の國會を見て、國會の實力は常に之のみと言ふものあらば、亦他の一の誤也。

吾黨は决して帝國議會に失望するものにあらず。寧ろ其の過分の發達を多とするもの也。决して之に失望せず、左れど、亦た之に過望するとなし。帝國議會の能事は帝國議會の能事なり、其當然の分に越えて、何事をか能せん。

蓋し、議會の勢力は、其議員にあらずして、輿論にあり。現に、今の議員が、輿論、（彼等に尤とも直接する一部分の輿論）に制せられて、地價修正説に傾むくを見よ。

而して、輿論の根底は、地方人民戸々の爐邊の談話にあり。膝を曲げ、澁茶を喫する、田舍野郎の通俗なる政談は、遂に合して、三百の議員を動かす也。

此故に、たとひ議員に怒濤を回し狂風を防ぐの雄辨ありとも、到底、撰擧人戸々の輿論に合せざるときは、實力を有すると能はず。左れば、第一に養はざる可らざるは、此の田舍戸々の輿論なり。此輿論にして、正しきに合ひ、賢こきに適せずんば、議院内の議論到底久しきに効あるとなし。

此故に、政治上の事業に志あるものも、只だ議院に入るとのみを以て、得たりとす可らず、地方に在つて、撰擧區を教育するも亦た政治上の事業なり。而して、其何れか大なるは、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

世の評判によりて定まるにあらず。其人の長所によりて定まる也。長所に尤とも適する所ろの天職を盡さば、則はち其人に於ての最大事業也。

此は、假りに、政治上の一例を擧げて論じたるものとす。他の百般の人の事業、皆亦た此理義を以て覺悟すべし。譽を以て職を擇まず、天職を考へて其任を辨じ、至誠愛人の念ひを以て、吾居就を決せば、天下の人の職分は、其顏の異なると共に異なり。其異なると共に至適の妙味生じ、妙味生ずると共に、其人の爲の大事業あり、此の大事業あると共に、當然なる十分なる正しき譽れ、個々の人の上に宿らん。かくして、万民皆な安心立命の地に立つ。

識者もし此策を以て迂なりとせば、更に迂ならざるの道を示せ。公等が敏速なりとする智策は、百年同じきとを繰反すものにあらずや。夫れ、大道を行く尤とも早し、心を換ゆるの敎、第一に速効あるを知らずや。

四　去つて田野に入れ

故に、吾黨は、有爲多望の人士に告ぐ。公等、府下に居るとのみを、事業に要ありとすると勿れ。若し、風頭に立つて宣言する底の事業を爲さんとせば、府下に居るは即はち要あり。然れども、他の幾多の事業は、都に於てすると、田舍に於てすると、差して相ひ違ふとなきのみか、今の如く中央集權に僻して、地方の事を苟且にするの事弊に際しては、去つて田舍に入り、直接に地方民に交はり、茲に、着實なる、堅固なる、根底深き事業を爲すと、尤とも必要なりとす。況んや、それ、地方に於ける事業は樂しみの事業なるをや。流水に臨んで、浮藻に文字かくにあらず、輕風に乘じて、空に砂塵を播くとは同じからず、皆これ、眞面目にして、根深きものなり。而して、接する所の人は、當世の浮薄人にあらず。與ふる所ろの感化は、一と時の流行にあらず。此に根城を定めて、百年の大計を畫す、樂しきと幾千ぞ。今の有爲の人、何故に、此樂しみを棄てゝ、久しく都下に瓢逸するとをのみ冀がふや。

今の自治區は、古の藩なり。古の藩は、俊才、才を試み、其經綸を實施するに、太はだ都合よき手ごろの試驗場なりき。而も、天下に幾十の藩あり、才子、各々此に散じて、各地に主權、主動の働を爲すとを得たりき。之れ、實に、今の一主

府、一中央政府の形勢と大ひに異なりたる所ろなり。然りと雖ども今の俊才、故意に牛尾となりて、鷄口の愉快を執らず、長く都下に局促して、他の僕役に甘んずるものは、必竟彼等に、去つて田舍に入るの決意なきに由る。あゝ、田舍は勞場を開きて、有爲の才を待てり。今日の時、もし地方に行かば、自由なる、快活なる、遠大なる事業到る處ろに人の手を待てり。有爲の人、何んすれぞ、其招きに應ぜざる。

思ふに、今ま都下に蚊集し、政界に局促し、天定自個の命職を顧りみずして、只管らに政治の夢にのみ惑ふの人、もし能く、事業の聖意を了得して、去つて地方に入るの樂を味覺するを得ば、現今の雜々たる世の騷ぎは、少なくとも、其過半を減ずべし。當世に於ける吾黨の治案策なるものは、即はち此の迂濶らしき一策なり。

當今基督敎會の失策

基督敎會には、常に三の要素ある可し。天帝に對するの禮拜一。同志間に於ける親和、二。社會に對するの事業、三。とれ也。

此の三要素に應じて、其望を逹せんには、敎會の制度と、會堂の建築法と、牧師、敎師、傳道師、及び委員等の組織とを、之に相應して經綸せずんばある可らず。

三要素皆な切要なり。然れど、實行の順序、覺悟の前后を言はゝ、禮拜、これ第一。親和、これ第二。社會に對するの事業は、即はち最后なり。眞とに、神を禮拜せざるものは、主に於けるの親和を爲すと能はず。主に於ける親和なきものは、基督敎主義の事業を同に爲すと能はざれば也。

今の我國は、基督敎徒を招ぎて、其事業を處望すると、尤とも切なり。基督敎徒たるもの、何すれぞ、之に應弁せざる可き。基督敎會が、社會事業に向つて趨らんとするは、頗ぶる當を得たり。

然れども、此の當然の運動を爲すに先だちて、先づ敎會々員の主に於ての一致親和なくんばある可らず。而して、此の親和一致を爲さんとするに先だちては、先づ、嚴肅、高潔、熱實なる禮拜なくんばある可らず。然るに、敎會に、此の先段の二要素を欠きて、而して、直ちに最后の事業を行はんとす

とす。其事業の基督教的特質を發揮すると能はざるは當然の數なり

志は遠大なる可し、實施は着々たる可し。段を超えて、不當の進歩を爲さんとすとも、決して得可らず。今日に於る、社會事業の必要に眩して、教會内の質實なる禮拜を忽諸にするものあらば、其罰遠からずして顯然たらん。

教會の制度、及び、會堂の建築法の如き、亦た此の嚴然たる要則に違背す可らず。神の教會に入らしむもの試驗、及び順序は、尤とも嚴密、尤とも鄭重なるべし。而して、此に誘ふの處置は、尤とも寛弘、尤とも自由、尤とる社會的なる可し。此の二事を決して混同するとなかれ。會堂の建築の如き亦然り。彼の會堂を用ひて、演説會塲に流用し、甚しきは、音樂會塲に通用せんとするが如き計畫は、抑そも誤まれり。如此き塲所に眞實の教會を建立するは極めて難しとす。今に於て、教會々堂を新築するものあらば、必らずや、之を二棟にすべし。一は、聖所の聖所にして、嚴然たる禮拜堂なり。他は、會員の親和、及び社會的事業の用に宛つべき也。もし、此の要理を履まずんば、教會の、三の望み、一も滿足なる報ひを得ざる可し。

吾黨思ふに、今の基督教會は、大率ね、此の要則を度外に置き、敢て之に顧慮せざるもの丶如し。社會的事業に熱望するものありと雖とも、禮拜を忽諸にして、信仰の根養を怠たり發表する所ろの改革法なるものも、淺々しくして、絶えて基督教的特質を存せざるものあり。又、禮拜に重んずるもの兄弟姉妹の親和に注意せず、社會的事業に些少の同情を寄せず、會堂を一種の寺院にして、之を天のホーム、光榮の出處となさゞるものあり。滔々たる、教會堂は、たとへば、講義所の如く、演説會塲の如く、太甚しきは、音樂會塲の如し。彼の、三要素を合して具備するもの、又は、三要素を至當の順序に於て準備せんとしつゝあるものは、極めて尠なきが如し。

夫れ、教會は、天に尤とも近きものにあらずや。而して、教會にして理想に近づくと能はずば、社會の、天に近づくと能はざるは、勿論ならん。

教會の事にして、もし改革行はれがたしと云はゞ、政治界、社會面に於て、改革の行はれざるは勿論ならん。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

吾黨は、基督教會の事にして、やゝ完きを得る迄は、斷じて外界の事を酷責すべからず、又、外界の事に失望す可らずと念ずるもの也。

悠々天地濶。世事與誰論。淸夜爲揮涕。白雲空斷魂。
死生蘇子節。貴賤翟公門。前鑒如瓶戒。無言勝有言。

文天祥

天子の功は人を用ひて自から用ひざるにあり、伊尹を用うる者は湯の功也、傅說を用うる者は高宗の功也、十亂を用うる者は武王の功也、周公を用うる者は成王の功也。

祖禹

貴きは聖賢たるより貴きはなし、富は道德を畜ふより富めるはなし、貧しきは未だ道を聞かざるより貧しきはなし、賤しきは恥を知らざるより賤しきはなし。

陸梭山

わけて入る浮世の山の深ければ
いよゝさびしきわが思ひ哉

よみ人不知

小說

ローレンス

第一回（下）

インヂロー作
若松しづ子譯

兩人漫遊の方向は、世間並の趣好を外して、殊更溫和な氣候を後に遺し、船に投じて北海に向ひ、寒帶の寒氣が骨身に徹へる鹽梅を試み、潮を吹く鯨の逍遙たる工合を撿、紅の日色珍ら敷此方に北海特有の動物が碧に透明なる氷山に群がる景氣を眺め升た。

それより暫らくは獸獵に身を委ね升て、獵師どもが森林の巨魁を退治する合圖の叫を夜な〳〵耳にし、廣原の彼方に捲舉ぐる凄まじ敷砂礫が幾千の鋭き眼光を放つは、一群の野牛の猛り狂ふと知り升た。斯して三ヶ年は一年の如くに過去り升た。それよりは、別に名高き都が兩人を誘ひ出し、タイベ、セイソの畔り、舊跡多き邊に遊ばしめ升た。此二大河は其傍

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に幾多の英雄名士を隠し升たが、空氣は今に其功否を漏し、其評判は引く水に聞え、入合の空は其生血に染り、音として其名聲を歌はぬものは有ません。

四年目の年も暮れ果てゝ、壯年は家に歸り升た。これを歡迎するとて、さしも住心地よきをも家を花やかに飾りなどしつゝ、老母は殊に悦ばしげでした。父は眉に皺せ、心易からぬ躰に打案じて、「さても犬と獵銃で一生を送らせることは出來ない、たつた一人持た其息子が夜床に就くは氣息を續ける爲、眼覺るは馬に乘くらする爲といふ樣では」と憂慮致し升た。

祖父の心にはまたかふ考へ升た、孫は、働らかせるか、消費せるか、二ッ一ッだが、矢張りつかはせずばなるまい、當分はまづ家へ置き、暫らくしたら、在校中や、旅をして居る間に懇意にしたゑらひ人たちと交際に出かける樣に、折々暇を遣るが好からうと、かふ考へ升た。老人たちは、壯年の快活なる風采、威勢よき歩み振りが物珍らしく、固より嬉しげなる性質の上に、前途遥かに望多き將來を迎へて、何をか待設ける氣配が有升た。何をと問ふ人あらば、已さへ知らず、たゞ安閑と居眠り、小成に安ずる人の嘗て立る例のない立派な功名と、答へ顔でした。父と老人たちか捲かへし繰反して考へた間に、壯年は問ずして、此三人が長い年月、己れ一人を樂しみに待詫たと、淋しげなる家族を賑はし、老人たちが殘生を切めて樂しく送らするは、主として己れの任なるとは、疾承知したものゝ、さりとて今に爲すともなく、物珍らしさ失せやらぬ我家に、日を過ごし升て、學校に在つた昔しと變らず、若々しく、氣樂でした。時としては、父が朝な／＼人を避けて獨り靜かに思想を鍛へた書齋に、入込み、積上た新版の書に飽まで歡樂を貪り、又折にふれては、夜更けて床を離れ望遠鏡に天を探り、思を凝らして珍らしき星を尋ね升た。又時として、今に矍鑠たる祖父と共に、馬匹を列らべく、彼が物語りに耳を澄まし升た。

ある日平生閉ぢこめて、日の影さへ往來せぬ亡母の部屋を覗き、次に何心なく開いた納戸の内に、老ひて尚顔色の艶々とした祖母が、自慢の砂糖漬にコルクして、獨り餘念もなくニコ／＼する處でした。壯年は、有合ふベーコン（鹽豚）櫃にユラリト腰かけ、好物のもの一ッ二ッ摘みて、何やら口ずさみつゝ、祖母のする樣を見守つて居り升たが、急に思ひ起すとが有つ

たと見へ「おばあさん、僕に全躰何をさせよふといふのだろう？どんな計畫があるのだらう？」。祖母は、老の僻とて、はや涙ぐみ、口籠りつゝ、「何をするといつて、おまへ、矢ッ張こゝに居るが氣樂ではないか？、面白くないといふのかへ？、どこへも行すとんだ。何をするにおよばんよ。マア〱落着いて家に居るが好い、物に不足はないではないか？」といへば、壯年は「ナニ、僕だつて、余處へ行度心持はないのです」。「それなら、倚さら重疊といふもの、先づ樂をしておいで、その嬉しさうな顔を見せて呉れるが何よりだ、それとも、おやぢが此間買つてくれた馬が氣に入らんとでもいふのか？さうでもないと、よし〱其まゝこゝで何でも好な勝手なとをするが好い、家に居てさへ呉れゝば、お金の入目は管はないよ」と、いひ升た。

然るに、壯年は、腕組をしたまゝ身動もせず、何やら心に濟まぬとがありさうに、口をすぼめる有樣が、か笑い程故、祖母は微かに、嘆息を洩して「それならば、何かし度といふのだへ？」僕、百姓がして見度んです」。

孫可愛の至情に他愛なき祖母は、さふいふ顔を見詰めて、其人品が百姓業するにふさわ敷や否と考て見升と、………どふして〱これが百姓どころか、侯爵の殿さまといつても恥かしくない、立振舞の品の好さ、嚴肅な父親が遺傳の美貌、尋常に氣高き目鼻立、悠々と歩を移す擧梅の凛々しさ、わたしなどが知らぬ人であの樣な人物に出逢ふたら、あれはどなた樣と恐る〱問ふとで有らうと、心におもへば、口に出る言葉さへはしたなく、片頬に笑みつゝ、恥らひて「さうおいひだが、わたしたちは、おまへを一廉の紳士に仕立る積りで敎育したのだに、」といひ升と、壯年は眼に笑をふくみ、ばゝの心を一層とろかす程可愛き高慢振して「御注文通りになつたから好では有ませんか。祖母は彌よ得意顔に、「眞におまへのいふ通り、注文通りだ、注文通り」。といふ言葉に續いて、壯年は、「それならば、倚さら、するとは何でも僕の勝手なを撰んで、差支は有ますまい。おばあさん、僕が百性になれる樣に心配して下されば、何より有難いキット後悔はなさるまい、さもなければ、遣損ねるだらうと思ひ升、」といふに祖母は、「そんなとが有らう筈はない、しかし、おまへは、間違ひなく、其量見か」といつて笑ひ升た。壯年は倚………「おちい

さまが、去年お買なさつた田地、あの小さいのを、僕に管督させてと頼んで見てください農業は大好ですから」といひ升た。祖母は女心の信じ易く、思ひ直して、言葉を約へ、約束通り、其夜、祖父と父のまへに、其一條を持ち出し升た。

「ぢいさまや、ローレンスは、百姓になるが志願だといひ升よ。わたし等の思ひ通りではないが、まだしも百姓といへば、增しなやうな」。かふ聞いて、祖父は心中大に悦び升た。孫は、さへぎつて、已が宿志と計畫を縷々說明いたし升た。老人は、巧みに、心の滿足を蔽ひかへし、餘り進まぬといふ氣取で、心得など申し聞かせ升た。それから、一寸、言葉を止め「おやぢに問ふて見なさい、おやぢが、承知でさへあれば、わしは宜敷」といひ升た。こゝに至つて傳道師は說得の職目を引うけて、職掌がら、宗敎的の話しに移り、開闢以來、人間第一の事業、前途に大神の御加護あれかしと願ひ升た。

閑書

英人某に與ふるの書

櫻井明石

左の一篇は、近日某社より出版せんとする希臘孝子腓立比物語の譯者が、原書を貸せし英人某に贈れる一私書の文なれども言、脩身、達文の事に渉りて苦慮慘憺たる處、人に示すに足れりと思はれ、且つ該の物語の大躰を叙するものあればとて、遂に此に掲載す。

先便に腓立比物語脫稿仕候赴一寸申上置候處其翌日より稿を更へて添竄、訂正いたし本日漸く卒業仕候誠に御大事の御書物永々拜借仕り以御蔭高行の物語不文ながら反譯出來千萬難有奉謝候反譯の際度々のあけほどきに毀損の個處不少御重寶かたの如くに相爲し候段重にも御宥恕被下度願上候

御書物拜借仕候てより足かけ三年に相成り一昨年の夏の頃にて候ひき一夜初更時分より讀みはじめ候ひしにメサロス夫婦が薄命ミカエル、サントスが俠行腓立比が至孝勇猛ムス

タハが貪婪無厭だん〳〵と讀みもて往くに悲むべく喜ぶべく驚くべく憎むべき事情形勢目に覩耳に聞くが如くがめこそ聲も立てゝ讀みをり候へ腓立比が至孝の高行に打たれて嗚咽しては聲しどろになり歔欷しては涙に字も相見えず幾度か巻を按じて涙を拭ひ拭ひては讀み讀みては拭ひその夜鷄の鳴ふころまで手巻を釋つるに忍びずつひに業を卒へ申候まことに有りがたきまで貴き腓立比が孝心佶く萬難のなかに在りてその信仰を守り到る所能く人を動かしてその素志を達する漸々平生尊兄が我が寶典なりと仰せられ候も御尤にて小説が事實か存ぜず且原著者幷に英譯者の姓名も相知れず三十年前の出版にかゝり候ものなれど寔に是れ不朽の書御承知にも候はんが弊邦建國以來列皇忠孝の道を以て世を治め忠臣は必ず孝子の門に求め孝子孝婦の閭に旌し來りし處に支那の文明東漸仕り朝廷にては益す斯孝道を奬勵せられ下ざまの我人みな斯道に注意仕候て今日に至るまで二千五百有餘年皇統の連綿として國祚の窮盡なきは偏に斯道光輝の照らす所にして摩西の十誡中第五誡に附言し有之候神の聖約は現在弊邦に灼然なるとに御坐候こゝにまた神の御攝理のもとに維新この

かた基督敎の追々廣り候に付ては桀の犬が堯を吠え候とおなじく從來立敎の旨と聊か相違ひて聖書にはまた基督がおのれに從順なるべく道を守るに勇猛なるべき義を極言いたされ有之候へばその片言斷章を取り來てよく前後も取調べず知識あり學問あり候ものまでが頻りに之を疑ひ果ては口を極めて基督敎を罵詈讒謗いたし異端邪説とするに至り申候小弟不肖にして身にその行は無之候へども幸に斯道の國に生れ儒敎の敎育を受け又幸にも基督敎の光に照らされをり曩には同じくこの妄見を懷きしもの論者の申す所强ち悪意に出づるにも非らざるを解量いたせばいかでその蒙を啓き基督敎の寃を雪がばやと心懸け居候處幸にして此書を拜借披閲いたし腓立比が思慕至孝その宗敎の確信相待ッて此一大事を爲し候こと百千の辯解にも説敎にもまして一は以て愚者の蒙を啓きて豁然開悟いたさすべく一は以て敎内靑年の男女に益す斯道を奬勵い させ度しと存じ反譯の旨尊兄へ申上候處早速御容許被下その年一二章反譯仕候ひしかど奈何せん御承知の如くもと儒生たりし小弟文章として學びもし作りもしたるは漢文のみにて三四年以來少々見る所これ

あり鎌倉以降近古の文學の業務を餘暇研究仕候ひしが小説の文に至りては餘り力を用ゐず素修既に如此に御坐候故此篇反譯に臨みて困苦一方ならず仍て一時中絶いたし專ら何くれの小説稗史破閲仕り殊に曲亭馬琴の著作は隨分幼少の頃より好きにて候ひしかば此際八犬傳弓張月など反覆精讀仕候然るに篇中説話の處反譯候には馬琴の文脉にあきたらぬ處有之言文一致の風を學ばんかとも存じたれどそれも徒らに冗漫に流れて心に染まず兎角思ひ煩し居候處不圖一二近松巣林の院本手に入り試みに讀み下し候ひしに意外に面白く説話の處は之を學ぶべしとこれよりまた近松研究と出掛け少く々得たる所もある樣子に付き少しく折衷を爲し本年初春より亦復此篇反譯に從事いたし漸く脫稿仕候

實に小弟はじめより此種の文學にならはず殆んど產の劬勞を爲し或は車上に巣林の戯曲を繙きて兩眼のいたくかすむをも顧みず枕邊に曲亭の集を備へて指頭の寒に感覺なきに至りかくて出で來し反譯こゝろみに家人を聚めて幾節か讀みきかせ候ひしに聽くものには耳に順はず讀む小弟には口に滑かならず徒らに古人の皮相をまねて、その神髓風骨を得ず殊に近松の如きは謂ゆる虎を畫きて狗に類するの誚は到底まぬがれたく、レオンツが腓立比を脅威しムスタハがハッサンを罵詈いたすくだりなど三たび意は致せどもいかにも語氣鄙陋にして近松を學び得ざるのみか平生四角の文字を讀みをり候ものが自ら下してかやうのものを綴り候こと師友の手前も耻かしく世の物笑ひとならむかを恐れ氣遣ひ今二三年も勉強してのちにもと思ひ候ひしが此書の如き固より文章によりて始めて傳へらるべきものにもあらず書中の事實世人に讀んでもらひたきがそも〱の本願不文の誹謗は甘んじて受くべく一日も早く世に公にいたすべしと決心仕候併し意到りて筆隨はざるの憾みいと切に候故猶再三再四推敲雌黃を加へ諸友の評定をも求今一回淨書いたしさて世に問ひ可申と存候就てはなが〱拜借仕置候腓立比物語正に御返上申候兎に角三四ヶ月のうちには出版仕度出來候はゞ入貴覽可申候不宣

"The cloud-capt towers, the gorgeous palaces,
The Solemn temples, the great globe itself,
Yea, all which it inherit, shall dissolve
And, like this insubstantial pageant faded,
Leave not a rack behind. We are such stuff,
As dreams are made of, and our little life,
Is rounded with a sleep."
W. Shakespeare.

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜録

御坂嶺の富士山

山月子

一月六日、余は甲府城北の妹がホームを辭して、郡內の茅屋に歸らんとし、曉に起きて庭より望めば、天氣晴朗として、富士の山頭、一陣の雲なし、御坂の富士は、甲州富士見三景の中にて、わけて有名なれば、今日は此路より歸らんと思ひ定めぬ。

涙の祈りして家人に別れ、金の手てふ處にて、送り來りし愛妹に別れ、靈の弟と共に、馬車に乘じて黑駒に着しぬ、乘車の價、一人三十錢。

黑駒より徐步して上る、御坂嶺は甲駿往復の驛路登降約三里餘、路頗る險阻、愛弟と行く〳〵語りて頂に達す、高さ五千〇九十五尺、古びたる藁吹の茶亭一軒あり、其屋後より立て顧れば、甲州の諸高山、巍然として並立せり、白峰は、其名の如く白妙の雪に包まれ、高さ一万〇二百十二尺、日本第二の高山とす、鳳凰山其右にあり、鳥の兩翼を廣げたるが如く、高さ八千八百五十七尺、駒ヶ嶽其右に峙ち、頂尖りて刺すが如し、高さ九千九百〇五尺、八ヶ岳中央に聳へて、形恰も富士の頭を抓り取るたるが如く、高さ九千百十六尺、金峰山其右に立ちて、頂乳頭の如し、高さ八千五百四十九尺、諸山皆甲州の高山たるのみならず、日本に於ける高山にして、白雪日光に輝き、峻壯雄大、見て以て心氣を快うすべし、余覺へず聲を擧げて『嗚呼愉快なり、人物の揃ふて居るを見るが如し』と曰ひぬ。

足を轉らし、將に下らんとして、前面を望めば、我が最愛なる富士山立てり、川口の湖面、小鏡の如く其麓にあり、山、超然として天を摩し、陽光之を彩りて、其美其淸、言ふべからず、聳然と曰はんか、悠然と曰はんか、泰然と曰はんか、巍然と曰はんか、肅然と曰はんか、溫然と曰はんか、此等の有らゆる形容文辭を用ひ盡すも、尙足らざるものあり、名畫の筆、或は其形を寫すとを得ん、然れども、書を以て、文を以て、言を以て、寫すと能はざるものは、實に其神靈の氣なり、此氣心に迫りて、余が靈の全くを動かせり、余は思はず『嗚呼』と嘆美せり、白峰に感じ、駒ヶ嶽に感じ、八ヶ岳に感じ、

たる、其感今は何くにか在る、彼の諸山を以て、世の所謂聖賢、英雄、豪傑とせば、或は釋迦とし、或は孔子とし、或はワシントンとし、或はクロムウエルとせば、此富士山に於ては、絶群超倫、無比無双なる、神の子基督の人物を想像するなり、彼を以て、大ならんとを欲して大なる人物とせば、此は無意に自然に高大なる人物なり、余が中心の英雄、豪傑、義人、俠客等の面影は、彼の諸山の形の心に消ゆると共に全く死し去りて、基督の像は、富士の美に感ずると共に心に充ち滿てり、シナイ山の雷鳴の中に、エホバがモーセに教を垂れ給ひし如く、ダマスコ途上の天光の中に、基督がパウロを一死再生せしめ給ひし如く、其如く、神は確かに此山を透して、余に無言の説教をなし給へるなり、

『柔和なる者は福なり其人は地を嗣ぐとを得べければ也』

『彼は競ことなく喧ことなし人街に於て其聲を聞ことなし、眞道をして勝とげしむるまでは傷る葦を折ことなく烟れる麻を熄ことなし』

『爾曹のうち大ならんと欲ふ者は爾曹に役はるゝ者となるべし、また爾曹のうち首たらんと欲ふ者は爾曹の僕となるべし、此の如く人の子の來るも人を役ふ爲には非ず反て人に役はれ又おほくの人に代て生命を予その贖とならん爲なり』

『凡そ自己を高する者は卑せられ自己を卑する者は高せられん』

『我はなんぢらの師また主なるになんぢらの足を濯ふ爾曹も亦たがひに足を濯ふべし』

此微妙の聲は、余が心靈の中に、誠に高く、誠に明らかに、聽へしなり、余は深く神の前に柔順謙遜となりぬ、下りて川原を行く時、余はつく〴〵と富士の顔を熟視せしなり。

余が心靈の歴史上、富士山は實に離るべからざるものにして、而して此御坂嶺の富士山は、其進歩の史上、殊に忘るべからざるものなりとす、感謝の情に堪へず、記して以て此嶺の富士山を世に紹介す。

輯整して此處に到りし時、編者が家族に悲痛の事あり、思緒亂れて麻の如ければ、得たる儘に同人の寄章を列ねて本誌の定葉を充たす。新土佐日記校抄の如き、此故によりて、今回掲載せず。冀ふらくは吾が年來知己の讀者諸君、幸ひに余が情を察して、暫らく寛假せよ。」近日の如く、編輯に全力を悉くすと能はざるは、切りに遺憾とする所ろ也。

閑窓茶話

脱蟬子

其一

讀書萬卷あまねく古今の義理に通ずとも造化の秘藴は。限ある人の心もて窮めがたし。面壁八年のむかし、びとも、枯野の夢に踏迷ひし行脚の人も、爲す樣こそは異なれど心の上には何をか差別とせむ。同じくこれ道の中途に生れての中途に死するもの、今年の花となつて、且つ咲き且つ散るもあり明年の花となつて且つ咲き且つ散るもあり。咲き出たる花が咲きあへぬ花を笑ふも嗚呼なり、散りつきたる花が咲きそろふ花を恨むも嗚呼なり。凡そ道を守り一を抱きて心を斯に寄するもの孰れか爲すありとせざるべき。浮華なる功名の心に動かされて文筆をもて遊戲三昧の道具となす如きは元より言ふには足らねど苟くも衆生濟度に心ある文士等が譯もなき事に角芽だちて根も葉もあらぬ喧嘩するは嗚呼の一つとや言ふべけれ。

其二

始めてミスシツピーを上りて其河岸に國旗を樹て、神の前に跪伏して首尾よき成功を感謝したるは米國に移住せし初代の英人なり。而して彼等は自己の成功を知れども、土人の幸福を剝ぎて辛らき目見せたるを露悲しむ心なし。この事を記して大に笑ひたるはマーク、トエフンなるが、吾等今日の世にも往々にして是に類するものあるを見る。港を出づるの船には、西風あれと祈るものあるべし、東風あれよと祈るものあるべし。西に吹かば一人は喜び一人は泣かむ。東に吹かば一人は泣きて他は喜ばむ。あはれ世の態を見るに、これに同じき事少なからず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其三

功名といふ事を此上なきものゝ樣に思ひ做して業々しく跳ね散らすにあらざれば人間の妙味はなきものと誤信するもの多きぞはかなき。元より名譽は人間に備はりたる快樂の中にも緊要なる者なるべけれど一生を名譽の爲に追ひ役はれて終るは達士の爲さゞるところなるべし。倘し昔と今と、名譽の舞臺を比らぶる時はむかしの名譽は甚だ得難く今の名譽は極めて得易し。むかしは名譽の勝利をあらはすべき道具とて無かりしかば、或は奇功をたて、或は偉業を起し、或はわざと異なる趣をもて人心を引き付けるなど仲々にうるさき事なりしを今の人は左程の奇功にもあらず左程の偉業にもあらぬ事まで新聞紙の上にあらはれて一日の中に幾百里を走る滊車に乘りて行くなれば名譽を商ふ人の爲めには此上なき仕合せなり。今日の議會に河野が一滴の淚を垂したりといふ事一度び新紙の上に載る時は寒村僻地に埋もるゝ賤の男賤の女までもさても河野は誠ある人なるかなと感ずることを得るなり。今日の紙上に川上が幾百圓の寄進を何等に納めしとあれば、明日の天下は、さてこそ川上といふ役者はあつぱれなる慈善家なり、いや義俠家なりなどゝ承知するもをかし。裡面より聞けば新聞社の雜報記者に川上の交際尋常ならず、あまつさへ雜報の投書を爲すものも當人なりと聞けば好き自由の記事を載するに難からじ。これもをかしき一つなり。高靑邱の「效樂天と題する古詩に左の句あり。「功名如美味、染指已云足、何待厭飽餘、腸胃生疾毒」知らず今日幾多の功名の士が腸胃に疾毒いかばかり多きぞ。

其四

新聞紙の事を記する序に思ひ出たる事あり。英國の女王ビクトリアを苦しむるものは新聞紙なりと聞けり。今朝は何時に起たまへり、何時に食卓に就きたまへり、何片の肉を喫したまへりなどの記事は殆女帝のすべての自由を剝ぎ去らんとす。かほどまでの記事は無かるべしとするも自から窮屈に思召さるゝほどの事はあるべし。思へば新聞紙といふものも長上に座する方々の手足を縛るほどの勢ありとは恐るべきかな。

其五

おもしろきものは犬なり。同じく夜を番る查公に吠ゆるは左程のことにあらず。耳垂れ毛つやゝかに一目して、洋犬な

りと知らるも智しらしき犬が洋人の後に吠へかゝるは一層おもしろき心地せられぬ。天下の事これに類するもの少なからず、一笑に附すれば一笑の價のみ、少しく思ふ時は限なき味あり。

海石榴舍歌話（第二）

井上通泰

野矢常方（京和二年明治元年）

歌よみとし云へば、おしなべてなよ〳〵として、吹かば飛ぶらんやうにも思ふらんかし、さるが中に、小澤蘆庵が念流の達人にて、或夜盗の入りしとき、薙刀執て追ひ退けしが如きは、誰も知りたるべければ言はず、人知らぬ限にも、野矢常方が如きは、歌よみの爲に氣焔を吐くものと云ふべし、常方は會津の人、通稱は與八、號を鑿園（たてその）と云ふ若きより歌よむ事をこのみ、また寶藏院流の槍術を善くす、藩につかへて和歌及槍術の師範たり、戊辰の年會津城の圍まれけるとき、常方齡六十七才にして、早く仕を退きて、城外に住みたりけるが、戰起りぬときくすなはち、家人に扶けられて城に驅け入り、桂林寺町口の廓門を守り居たり、城落つるに及びて人々常方の老たるを憫みて、逃げよと勸めけれども、耳にもかけず例の槍を奮つて、敵にかけ向ひ、一人を打取りて、遂に亂軍の中に斃れぬ、この人の歌に

櫻

弓矢とる身にこそしらめ時ありて
　ちるをさかりの山さくらはな

山を拔くちからありとも花の香に
　ひかるゝ袖をいかではなたん

題戀

あらはれんその名を願ふものゝふも
　人に知らるゝこひぞくるしき

など、みやびたる中にも、何となくをゝしき處ありて、貫之朝臣の口つきをかりて云はゞ、具足きたるものゝふの、花のかげにやすめが如しとも云ふべからんかし、一代の秀詠は

詠史

君の爲ちれとをしへて己れまづ
　あらしにむかふさくら井の里

今も櫻井の里にて燒くなる陶器には、この歌を書きつくめり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

まゝいとをかしきは、今の世にその名高き歌人にして、この歌を盗みて、我ものゝごとく短册に認めたるを、再びまで見つ、おもしろき逸話多きが中に、若き頃武者修業と云ふものをして、諸國を歴めぐれる程、京師に上りて、そのころ名高かりし加茂季鷹が門をたゝきけるに、季鷹あなづりて出で遇はず、さらばとて詠草を殘して立ち去らんとしけるに、季鷹取擧げて打吟ずること暫くにして、大に驚きて、俄に呼びかへして遇ひしとぞ、また近き世に名高き歌人近藤芳樹かつて奥州に遊びけるをり、途にて櫻井の里の歌を聞きて、いたくめでゝ、會津に立よりて、常方を訪ひしに、をりしも常方道場に出でゝ、子弟に槍術を敎へたる程なりければ、さる長技ありとも知らぬ身には、兼てのおしあてとは違ひて、いたく驚きしとぞ、あはれゆかしきかなや常方のうしあはれなつかしきかなや蓼園の翁、今の世かゝる人ありやなしや（未完）

詩人と詩人と

湯谷紫苑

嗟呼甚い哉、詩道の衰へたる、一に曷ぞ玆に至れる。噫甚い哉、詩人の產れざる、一に曷ぞ、今に及べる。

其れ唯だ椅子に憑りて、首を左右し、身を前後し、詩句を排列するの詩人はあり。詩集の博物館に去來し、古人の綾羅錦繡を剪裁補綴して、造化師的に甘心する詩人はあり。然りと雖も是れ唯だ兒戯のみ。石燕鸚鵡の徒のみ。未だ共に乾坤の妙機を語るに足らざる也。少くとも彼自身に於て、傑士にあらざれば、傑士と謳歌する能はざる也。少くとも彼自身に於て、人情（ヒユーマニテー）の襁褓に暖められ、天母の乳房に接吻せずんばあらざる也。

昔者ヘブライの詩人は肅如として歌つて曰く、

彼（神）は北の天を虛空に張り、地を物なき所に懸け給ふ、水を濃雲の中に包み給ふて、其下の雲裂けず、御寶座の面を隠くして雲を其の上にのべ、水の面に界を設けて、光と暗とに限りを立て給ふ、彼叱咤すれば、天柱震ひ且つ怖る

其の權能をもて、海を靜め、其智慧をもて、ラハブを擊ち碎き、其の氣虛をもて天を輝せ、其手をもて逃るゝ蛇を衝き透ふし給ふ、覩よ、是等は唯だ其御工作の端なるのみ、されど其の權能の雷轟に至りては、誰か之を曉らんや。

夫れ天地は斯くの如く、偉大なり、浩蕩なり、神聖なる秘密なる者あり、此の間に横はる。詩人ゲェーテーが所謂る萬有の公然なる秘密とは即ち是れ也。人或は問はん、大なる秘密とは何ぞやと。――公然の秘密、――凡般の人に公然にして、而かも殆ど誰にも見えざる者也。到處凡てのものに横はる所の神聖なる秘密なり、而して人之を曉らざる也。

換言すれば則ち、ツイヒテーが所謂る　表現の底面に横臥する所の、世界の神聖なる觀念ゝ也、凡ての表現物、上蒼天の星辰より、下曠野の花卉に至る迄、殊に人の表現及び其の働きは唯だ服粧又は成形のみにして、見るべく外に展示せられたるに過ぎざる也。此の神聖なる秘密は、凡ての時、凡ての所に存在する者也、實に存在する者也。最も多くの時と所に於て甚だ雲煙過眼視せられたり。而して神の現實にせられたる思想として、常に一或は他の方言にて、理解せらるべき萬有はサチリストが所謂る家具匠が共に配置したる死物の如く尋常、無氣力、凡庸なる物（マッタア）として考想せらるゝ也。

あゝ偉大なる哉、爾詩人！爾は即ち夫の神聖なる秘密の使者として、彼我の間に、其靈羽を昻低して去來し、其の他人に優りて、嘗て共に生活せる所の、神聖なる秘密を、吾人に默示啓告する者也。吾儕は敢て言はんとす、他人は之を知らざるに、爾は知るべく追ひ遣られたる者也。爾は自ら其の裏に呼吸生活すべく、定められたる者也。傳說は玆に無し、唯だ直接の洞察と信仰あるのみ。他人は之と共に戯遊すると雖も、爾は萬有と共に眞面目に在る者也。

――カーライル曰く、

預言者は道德の側に於て、むしろ善惡、義務、禁制の如きを捕捉し、詩人は日耳曼人が所謂る、美の如き美術的の側に於て、神聖なる秘密を攫取する者也。吾人は言ひ得べし、一は何を爲すべき歟の、他は何を愛すべき歟の默示者也。而して其の職分は實に各、他方に走る者にして、而かも分

離せられ得べき者にあらざる也。

又獨逸近世の批評家は曰く、

詩人は彼の中に無限を有し、其の無限の或る者を、彼が描出せんと欲する者に契合する者也と。

あゝ此の無限！又不死！Die Unendlickeit! 是れぞ詩人の本領なる。此活天活地の間に徜徉遊して、自由自在に、其の神秘を捕捉し來り、人衆に降りて、之を投げつくる者は福なる哉。あゝ詩人の天職其れ茲に在る乎哉、其れ茲に在る乎哉。曷ぞ其の多福なるや。あゝ爾のすひし乳房は福なるかな。爾の抱かれし腕は福なか哉。

杜美子曰く讀書萬卷、降筆如神と。夫れ然り、豈其れ然らんや。子美にして、よく之を言ふべきのみ。然れども子美たる者にあらずんば則ち、讀書縱令億萬すと雖も、空の空なるに過ぎざるのみ。

夫れ詩人のバイブルは即ち、人情なり、活ける萬有也。自ら己を義なりとする、パリサイ的詩人は禍なる哉。彼等は山を超え、海を渉るも、昆布を拾ふ海士が子にも及かざる也。能手をもて松の落葉をかき集むる里の童女にも若かざる也。然りと雖も、一旦天火によりて其口を聖別せられ、其秘密の靈杯をすゝり、蹶然として獅子の如く起つや、前に百萬の甲兵も競々として戰慄すべき也。温乎として羊の如く微笑するや稚兒亦懷くべき也。是れ即ち眞詩人也、

マモメヅンは左手にコランを握り、右手に劍を提げて、亞細亞、亞非利加の沙漠を蹂躙す。然れども詩人は左手に神秘の靈杯を把り、右手天劍を提げて、天地の間を自由濶歩し、ヒユーコニテーの野を左徃右來し、夜徑の孤兒を抱き、破窓の寡婦が涙を拭ひ、未練の情夫をして奮起せしめ、亡頼の驕兒をして、悔改の涙に咽啞たらしむ。

あゝ詩人よ、爾は全地を其の公園となし、借地となし、海を以て其の浴場となし、稅なく、妒みなし。蓊鬱たる森林の茂れる所、洋々たる江河のみなぎる所、爾其主人として之に臨み、他人は唯だ其内に在りて、借地人たり、寄留者たるに過ぎざる也。爾は天地の主なり、蒼海の主なり、又空中の主なり。

あゝ詩人既に葬られて、其土冷かに、吟咏の聲天地に響かざる既に久矣、六合に寂寞として、花徒らに發らき又散り、水

空しく涌きて又流るのみ。起て矣詩人！覺めよ詩人！天地爾を待てる、一日にあらざる也。

西諺に之れあり、曰く、詩人と畫工とは、常に其の國民の最も高尙たる思想を現はす者也と。果して之を以て眞理なりとせば、現今我邦の形勢は如何。畫工にして宇宙の秘密を感得したる者ありや否や。詩人にして活天地の靈化を得たる者ありや否や。蓋し之れあらん、吾儕不幸にして、未之を聞かざる也。あゝ今や我か國民の最も高尙なる思想は、果して誰に倚りて以て、世に表現せられたりや。

今や字句を錦繡にするの詩人世或は之れあらん。スタンザーを排列するの詩人、世或は之れあらん。然れども彼が腦髓、思想、行爲、即ち彼自身に於て詩人たる者果して幾人かある。否果して之ありや否や。敢てきかん。

夫れ人類は正直なる者あり、之を動かすに至誠の槓杆を以てせざれば則ち移す可らざる也。芥种の信仰よく山をも動かすとは千古不滅の靈言也。今詩人の以て一世を動かし得ざる亦以なきにあらざる也。抑至誠は至誠を產み、信仰は信仰を生ず。苟も至誠なし、信仰なし、安ぞよく鬼神をして哭せしめ天地をして震動せしめんや。

高津の阿闍梨嘆じて云へらく、

古の歌は、たとへば畫師ならぬ人の堪能なるが、用ある時、物にまかせてかけるが如し。後の歌は、畫師のかけるが如し。よけども、心より起れるは稀也。人のやとふに任せて、草もゆるがず、照る日も、汗もしとゝにて、冬の畫かけるに、見る人を寒からしめ、埋火のもとに、衣を八重かさねきて、夏の畫かゝんに、見る人凉しく覺えんをば、上手といふべきが如く、歌も其たましひをこめたらんをば、古の人につげりといふべし。

此嘆豈彼の世、彼獨りのみならんや。今の世亦吾儕をして、同一の嘆聲を反復せしむ。悲いかな。

カーライルのルーテルを評するや、實に是の言なり、其の善良なる性情、否柔和なる情感、貴尊、深遠なるは、彼も亦一個の詩人たりしなるべし！彼はエピック、ポエムを著作すべかりし、而して一詩をも書かざりき。余は彼を目して、偉大なる思想家と稱す。彼の心の偉大實に既に之を彰明す。

今や、詩を造る非詩人多くして、山の如く、又濱の眞砂の如し。然れども默坐天の靈氣を呼吸し、其電氣に感ずる眞詩人なし非歟

チー詩人！新しき榮譽は、森林及び牧場に於て給與せらるべきも、決して何時迄も城廓、刀劍によりて得べきにあらざる也。爾は世を見棄てゝ而て唯だ默想をのみ知る可し。爾は何時迄も人の時也、習慣也、厚意也、政治也、論説を知らざる可く、唯だ萬事を默思より取るべき也。何となれば、市邑の時は世より最後の梵鐘によりて、響き渡れども、自然界に於ては、一般の時は、動植物の相繼續する種族と喜びに喜びの重ねらるゝことによりて、計算せらるれば也。（エモルソン）

あゝ詩人！詩人！吾、爾を何くか求めん、吾、爾何くか求めん？

史傳

亞伯拉罕（アブラハム）

（其一）

土井久壽彦

假令アブラハムはキリストを距る幾千年前の人なるにせよ、假令其生地なるカルデアのウルとは如何なる處なるや、未だ一定したる確説なきにせよ、兎に角我人類の歴史に於てアブラハムなる一個の偉人のあるありて、直接に間接に歴史の潮流に一種の色彩を加へたるは、蓋し確乎なる事實なりとす、

人類の歴史に於て、一種特殊の光輝を放ち、國民相與に合躰協力して一定の目的を趁ひながら、駸々として進歩せる者是れイスラエル民族の歴史に非ずや、而して此歴史中に於て、所謂歴史的人物と稱ふる者を採り來りて具さに之を觀ば、一代の人物は一代の人物よりも次第〳〵に條達暢舒せるの跡あるを見ると雖とも、然れども何れも皆な其一生を貫通して詢に愛すべく慕ふべき崇高偉大なる性格の具備せるを見る、アブラハムとは正に此人種の劈頭に立てる、最初の歴史的人物なり、

只た恨むらくは、典籍全く具らず、此偉人の傳記も殆んど、磨滅して其詳細なるに至りては、得て知るに由なく、唯だ創世紀の一書と外に零砕の斷篇のみ、僅に其行跡の一般を載するのみにして、隨て後のアブラハムを知らんと欲する者も唯だ此に由りて其性格を揣摩するに過ぎずと雖ども、其さへ甚だ不充分にして觀來れば恰も一篇の史詩を讀むが如く、人をして彼は寧ろ詩中の人物に非ずやと疑はしむ、

天下若し難事ありとせば、人物を捕へ來りて之を其有のまゝに描き出さんとするが如きは隨分の難事中に加へざる可らず、凡そ人物を描き出さんとせば、已れ先づ其人物寧ろ其人物の心を已が心に映寫せざる可らず、若夫れ已が心明鏡の如く一點の曇なく其の忠奸美醜忽ち露れて毫も蔽るゝ所なく皆な其有のまゝに映寫し

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

來れば則ち幸なり、然れども此の如き人、世に幾何あるや、古來文士等を操りて人物を論ずる者多し、然れども細かに之を穿り來れば誰か能く其人物を其ありのまゝに描し出せる者ぞ、或は已か胸臆の中に入れて之を限劃し、膨大し、以て已が人物となすか、然らずんば之を偶像視し、仇敵視し、其眞價を忘れて、一種の怪物となす者比々皆な是なるに非ずや、若夫れ九泉に眠れる人物を起し來りて其所論を見せしめば、能く莞爾一番我心を得たりと苟背する者幾何かある、人物を其有のまゝに描き出すこと實に難しと謂ふべし、而して其人物にして偉大なれは偉大なる程。之を描すの難も亦た一層を加ふる者とす、會々之を描き出さんとするも、其材料にして欠乏せば、其困難も猶ほ一層を之に加ふる者と謂ふべし、アブラハムは正にかゝる人物なり、アブラハムを描き出すこと、決して容易の業に非ず、

然れども偉人は常に偉人なり、時と場所によりて制限し得べき者に非ず、偉人は恒心を有す、一事に於て眞に賢こき者は他事に於ても亦た賢こき者なり、所謂小事に忠なる者は大事にも忠なる者なり、此を以て人物を知らんと欲する者は其生涯中に於て、最も多く其人物か其心血を發して成したる事を採り來りて、具さに之を觀ば、以て其人物の果して如何なる人物なるやを知る、難き事とせざるなり

アブラハムは偉人なり、世の僞英雄が朝に人を欺きて一世を籠蓋しながら、夕には事露れて陋巷に窮死するが如き、片々輕慓なる者の比に非ず、其一生を貫通して一定不抜の主義を有し、計企を持す、彼に於てなせし事も、此に臨みてなせる業と聯し來れば皆な仝一の心胸より發す、然らば則ち典籍全く備らずと雖ども、猶ほ世に存ぜる重なる行跡に就きて、具に之を觀察し、謹んで之を判せば、庶幾くは彼を評價するに於て過なからんか、

アブラハムの傳記は彼がカルデアのウルを出でたるとき、即ち神の召によりて其族カナンの地に遷移したるに始まる、創世紀の記する所に依れば、

爰にエホバ、アブラハムに言たまひけるは、汝の國を出で、汝の親族に分れ汝の父の家を離れて、我が汝に示さん其地に至れ、我汝を大なる國民となし、汝を祝み、汝の名を大ならしめん、汝は福祉の基となるべし、我は汝を祝する者を祝し、汝を詛ふ者を詛はん、天下の諸の宗族汝によりて福祉を獲ん、 (創、一二〇一—三)、

との文あり、讀む者をして先づ玆にアブラハムの爲人を想見せしむ、之を彼の日本古代史を讀みて、

天照大神命して曰く、豐葦原の千秋長五百秋の水穗國は我御子天忍穗耳命の可知國なり、 (古事記)

てふ文と比較せば、誠に思半に過る者あるなりアブラハムは此の如くにして其生地を出で、ハランに留り、一家從僕相率いて、遠く、西方に旅立てり、

アブラハムが一生の行事其基く所實に玆に存す、熟々彼が一生を通觀すれば、彼か一生は實に選擇の一生にして、常に其一を擇んで其他を棄て、終始一貫して進めること猶ほ驚瀾怒濤を排して大艦の進行せるが若く、誘惑疑團の中に在りて泰然動かず、堂々として勇進せる樣、誠に目覺しき者あり、而して其基く所は實に玆に在り、凡そ人の進むと退くとは一に其選擇の瞬間に决する者なり、彼を採らんか、此を採らんか、彼を棄んか、此れを棄んか、此一瞬間は實に人生の危機たり、回轉點(ターニングポイント)たる者にして、此一瞬時こそは進むか、退くか、左するか、右するか、人生運命の因て以て決する所なりとす、楊子が岐路に泣き、墨子が練絲に泣きたるは、人生を觀し來りて、其機微の一點を戒めんとする最後の聲に非ずや、素養其宜きを得ずんば、玆に莅んで其選擇に躊躇せざること難し、アブラハムの一生、此危機に遭ひ、此回轉點に莅めること前後幾回なるを知らず、然れども常に彼を棄て、此を採り、毫も狐疑躊躇せるの痕跡を顯はさず、排し去り排し來りて、終始一定の行程を蹈む、其素養する所實に想見すべきなり、

批評

和文學史（大和田建樹氏著）

透谷子

頃者文學史の世に出るもの多しと聞く、而して世評の之に對する甚だ厚からざるを見て聊か惑ふところなき能はざりし。鈴木弘恭氏の文學史先づ余が机邊に來り、而して後に大和田氏の和文學史余をして披讀の榮を得せしむるに至りて、釋然として自ら領づくところあり。弘恭先生の著作に就きては別號に於て評するところあるべし、爰には大和田先生の和文學史に對する愚見を述べて見む。

和文學史一卷、學者としての大和田氏に惜むところなき能はず。大和田氏一個に惜むにあらず、今年文學史を編する諸家の爲に言ふ可からざる慷慨あり。文部省新令を發して、書買事を東西に驅り、學者忽ち筆硯を研きて教科書を撰す、書買としては可なり、文部省としては可なり、學者の品位に於て果して如何。著者は自ら辭りして、幾星霜の事業なりと序すれども、吾人はこの書に對して、加かく首肯すること能はず、大和田氏の著作として、幾星霜の事業として、此書の眞價を判するは、余の敢てするに忍びざるところなり。落合、小中村の諸先生、にて既に事足れるを猶ほ幾多の和文學家をして、一々書買の需求に應ぜしめんとはするぞ。遂に京童をして、和文學者は教科書學者なりとの譏言を吐はしむるに至らばいかん。

然れども、余は和文學史の著を以て全く無用のものなりと認むるにはあらず、多くの專斷的、推想的、の文字あると共に幾多の考證と、發見との存するものあるは余と雖之を疑はず。げに今日の文學教授方に遵ひ、今日の文學程度に照らせば、この書の如き、教科書としての價直は十分にあるべし。

今この書の特色とするところを摘んで言へば。

第一。和文學史と題するだけに、國語の變遷に注目することとこの書の自ら重しとするらしく思はれたり。「和文」と言ひ、國語といふなど、今代和文學者の力を專らにして搜索研究するところなれば、元より、斯かる種類の發見も價直はあるべけれど、文學は國語にあらず、文學は和文にあらず、文學史と題するからは時代〳〵の思想の變遷、内部潮流の傾向を記述するにあらざれば物足らぬ心地するなり。言語の上に於ては、佛

教の渡來も漢學の渡來も、明涼に說示してあれど、偖て佛教の精神、漢學の精神が如何に我古有の精神と相戰ひしか、相結びしかなどやうの事に至りては、著者の念頭に浮ぶもの無かりしが如し。もし初學には面倒なる事を敎ふるも無益なりと言はるればそれまでなり。

第二には著者が和文家として、和文を庇護し、外來語を何となく嫌厭するの筆鋒を往々にして見出す事あり。もし敎科書として用ふる時に和文學を養成する目的のみにてあらば、これもよからむ、さりとて今更に和文復古も何の用あるかを知らざるに。然れども他の所謂文學史なるものに比較して、此弊の稍や薄きものなる事を知らばあながち責むべきにもあらじ。

第三には著者が作者を紹介するに、秩序よくあらゆる文人詞客を網羅して二三行宛を以て、概畧の性行履歷を擧げたる事なり。然れども、これもまた文學史として見る時は甚だ不滿足に覺ゆるところなきにあらず。西行法師の性行をあらはす為に其逸事天龍川の渡船を擧げて、……されども西行は怒る色なく「おとなしく上陸せし事もありき、忍耐の強き人なりしは是にても思ふべし。と言はれしが、西行と忍耐とはいくばくの關係ある、文學の人としての西行、豈に忍耐の一字を以て傳へらるゝを喜ばんや。又た近松門左衛門を敍する一段に、「博識多聞、人情に通じ慷慨を帶びたるは其作を讀んで味ふべし」。とあるはいかに。門左衛門と帶慷慨とは果して如何なる關係かある。

要するに、文學を文學とも思はず、他の諸科學のかたはらに修學すべしとする今の世の文學の敎科書としては、著者自からも言へる如く簡易にして便利なるべし、文學史としては遺憾ながらもこの書を推重すること能はず、忌憚なく評言を呈する所以のもの、余が大和田氏を重んずること多ければなり。

○爪の糸目(篁村著)

透谷子

人間を離るゝ事數丈の高きに登りて轉變の浮世を觀じつゝあれば斯うなりこれはあゝなりと悟りめさるは篁村翁の篁村翁たる所以なりと聞きぬ。さればこれも一種の哲學見なるからに、日蓮上人の開張日を一日かゝしても爪の糸目を一回は通讀するも來生に取りて損の無き業と思はるゝなり。

斯うは申すもの丶流石に一切世相を鵜のみにしてかゝられたる翁の筆法輕妙と賞め細微とたゝえんも例のことにてめづらしからず。あちらをつゝきこちらをこぢり一笊にたぐりこみた爪糸目の中には、山中の隱士もあり、出世の番頭あり、妖怪の舞妓あり、零落の武士あり、不孝の娘あり、千種萬樣の爪どの一々に擧げ盡くすべからず、朝日新聞の讀者のみか、あはれ番頭小僧おさん令孃誰が讀んでも面白からずといふ事なき保險附の讀本なり。

○小說相撲（春陽堂梓）　透谷子

青軒居士と名告りたる人の「この眼」と、天彥子と名告りたる人の「錦の袈裟」とを合綴して一卷とす。

「この眼」は墮落官吏の述懷にて、隨分こみ入つたる叙事あり。花柳社會の事情を勸懲流の眼鏡もて見貫きたるやに覺えて味なきにもあらず。文脉も何處か手慣れたるところありて初陣とは思はれぬ節あり、この作にては喝采を博する事も覺束なけれど次の作には目ざましきものあるべし。

「錦の袈裟」は彼の極端なる寫實派に反動して新旗幟を立てたるシパルリツク、ローマンサーとも云ふべき涙六一流の毛色の異りたるもの、讀み去り讀み來る間々業々しき描寫事々し、叙事宛然德川時代の時代物を味ふ心地す。これも亦た文界に現はれたる一現象にして、詮ずるところ、讀書社會の傾向を反映するに過ぎず、兎に角花々しき初作と申すべし。

○新教育

教育上の諸雜誌近ごろ一齊に論調を激くし、皆ともに文部省を擊つもの丶如し。彼の教育報知らす、辻次官の辭職と共に俄然所謂る民黨らしくなりたるこそ、可笑しけれ。近日新た世に出でたる「新教育」なる雜誌の宣言に云く、

二十年來一定の主義無く、漂々浮々、風浪の方向に任せ、天下の志士をして痛嘆憂慮措く能はざらしめたる、帝國大日本の教育は、今や一大革新を爲すべき時機に到達せり。

惟ふに教育の事、國家安危の關はる所、其の制度、施設、固より深く考慮を費さゞるべからず、徒に一朝の權畧術數を以て朝令暮改するが如き、國家の不幸測るべからざらんとす。

而して吾輩は、教育の大事を擧げて神聖さのみ空誇し、天下の少年を、世用に迂遠の愚物たらしめざれば、破產の蕩子たらしむるが如き方略を執るものを惡む。

茲に於きて乎、吾輩は其の自ら信ずるところを以て、日本教育の一大革命を謀らんとし、之れが機關として、『新教育』發行の必要を認めたり。

蓋し以て積年の空教育を打破し、教育社會腐敗の空氣を一掃し、朋黨の跋扈を挫き、不潔の自稱教育家を誅伐し、僞政治家の暴論に當り、文部の現政に直言を盡し、大に日本教育の發揮を謀らん一片忠國の微志のみ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

片々

淡海子編

●東京青年會　の丹羽淸治郎、ミラー氏等は客臘關西地方に發途せられたることは、前號に掲載せし所なるが、同氏等は京都に至られ滯留中、同志社、高等中學校、商業學校、醫學校等の靑年會員諸氏に會語し、各靑年會が互に氣脈を通じて益々强健に運動なさんことを奬めり。又同地靑年諸氏の周旋によりて常盤旅館に於て懇談會を開かれたる由。又高等中學校の靑年會員諸氏は、同窓生に基督敎の感化の普く及ばんことを盡力せられ、前途希望滿々たり。又神戶に於ては同地の靑年會員諸氏と、タッ〻レイ孃の館に集ひ懇話會を開かれ是亦有益なる會合にてありしと云ふ。

●名古屋の靑年會　人の知る如く愛岐は人情風俗荒みて誠に嘆すべきの極なり、同地に我敎義の入るの止むべからずして、而かも佛敎根跡の地たり、何人も此地に道の布れんことして甚だ煩悶す、然れども同地の靑年會に名ある、正木、時田、川村の諸氏等雄乎奮勵其燈を負へり。吾人は初春より同地の靑年諸氏等が如何に其運動の報を齎し來るかを括目して相俟つ。

●札幌靑年會　札幌の基督敎徒靑年會にては、本月五日美以敎會堂に於て其總會を開きたるに、出席者凡そ二十名にして、賛助會員伊藤一隆氏の熱心なる勸話ありて后、規則の修正、役員の改選等をなして散會せり。

●東京靑年會寄宿舍　神田三崎町の靑年會寄宿舍にては、去る卅日の夜同舍設立の一年期祝會を催し同舍長、三好退藏氏の演說を始めとし、餘興には落語等もありて頗る盛會なりしと、久しく同舍に寄宿し勵精勉學されたる、宮下義夫氏は客臘三竪の爲に侵され府下大森村なる、親戚の家に在て專ら療養を加へ居られしが、去月十三日竟に永眠せられたり、同舍に寄宿の諸氏は常に同氏に向て厚き友情を表し、其病中も始終慰問怠りなかりしが、其訃に接し追惜の情に堪へず過般相會して氏の爲めに追悼會を開かれたりと云ふ。

●弘前基督敎靑年會　一月二十三日午後六時より同所寺町會堂に於て、故新島襄先生第三回紀念演說會を開き、會員須郷元茂、岡田哲藏、益子惠之助、ヲドマンの四氏が演說あり來會者靑年學生百二三十名而して、當日平野榮太郎、平田孝次郎本多末四郎の諸氏亦た演說すべき筈なりしが事故ありて能はざりき、

●津市基督敎靑年會の計畫　三重縣津市の基督敎靑年會員は、津市に一の倶樂部を設立し、演說談話の用に供し、又別に書籍室を設立せんとて目下奔走中。

●北海禁酒會　同會は本月三日第六次總會を札幌敎會堂にて開きたり、入口には綠門を作り紅燈を吊し國旗を交叉し、室は皆綠葉と國旗にて飾り、正面には大なる國旗二旒を埀れて、其下に光栄ある同會の紀章なる幟を掲げ、午後一時より三時までは議事をなし規則の修正役員の改選あり、伊藤一隆氏を名譽會頭に推薦し、會頭には大島正健氏最高點なりしも斷て辭任せられたれば、次點者藤村氏當選し、副會頭には岩井信六氏當選したり、更に午后六時一同會歌を唱て開會し初に昨年中の事業の報告あり、夫よりパチラー氏の「棚おろし」と題する演說あり、會頭伊藤一隆氏は同會創立以來五年間會頭となりて働き來られしが、此度函館に轉任せらるゝことなりしに付告別として熱血を濺ぎ同會前途の事業に就きて演說せられたり、了りて餘興として種々の音樂ありて九時過ぎ散會せり、同夕の來會者は二百余名なり。

●德嶋靑年會　當地には嘗て基督敎靑年會ありしも、昨春以來恰も解散の姿なりしが、今度當講義所靑年信者四五輩の手にて之を起し、每週土曜日の夜演說會を開くことゝなれり。

●京都四條少年部　四條敎會少年部は敎師の盡力に依り追々好都合なり、去廿二日に賞品授與式ありしが、受賞生徒は六七名に餘れり、校長は當時松崎又三郎氏なり、大人部も近來は敎師宜しきを得て、每回五十名以上の出席者あり、靑年會にては去廿日夜會堂にて說敎會を催ふせしが、凡そ九十名に近き聽衆あり、辨士は坂田貞之助ゴルドンの二君なりき、又去十五日聖晩餐禮施行此日入會者三名、

(三件基督敎新聞)

●京都醫學校基督敎靑年會　京都醫學校キリスト敎靑年會は昨年二月數名の在校信徒を以て組織せられ、爾來每土曜日津下紋太郎氏を聘して聖書の講義を聞き居たりしが、其結果として漸次入會者を增加し現今廿五名の會員中既に洗禮を受たるもの過半數に及ぶに至れり、されども此を以て在校四百の生徒に比較すれば、實に九牛の一毛だに及ばず、會員は佛敎靑年會の反抗及其他の艱難あるにも關はらず、故ウエスト孃來京を幸ひ直ちに之を聘し、本校に於て禁酒演說會を開らきたるを始めとし、本會を公然學校に發表するの機運に際し、益々其隆盛を來さんが爲め其方法に着手せり、十二月三、四の兩夜洛陽敎會に於て村田勳、海老名彈正の兩氏を聘して演說會を開らきしに、來會者百名に及び頗る盛會なりしと云ふ

(靑年會月報)

●山口縣玖珂郡基督敎徒靑年會　全會は元と岩國基督敎徒靑年會と稱し、數年前より設立なしありたるものなるが、昨年總會を開きて規模を擴張し、玖珂郡基督敎徒靑年會と改稱し、目下會員十數名ありて、本部を岩國に置き、支部を大日田に設けあるものなり、又會員は彌信仰を鞏固にし團結を强からしめんため、每月第二土曜日を以て集會を開き、講談感話等をなし、時々演說會を公開し地方人心の安逸者を警醒せり。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

一月卅一日發行

文學界

第壹號要目

琵琶法師（悲曲）　古藤庵

吉田兼好　禿木子

阿佛尼　天知子

文章道　巖本善治

富嶽の詩神を想ふ　北村透谷

漫詩　古藤庵

（附錄）

女歌仙家集講義　大和田建樹

兼好清師家集

阿佛乳母の文

		外府
一冊	六錢	六錢五厘
六冊	卅三錢	三十六錢
十二冊	六十錢	六十六錢

第壹號は歡呼の下に迎へられ賣切に相成今般再版成りたれは續々御購讀あらんことを請ふ

發行所　東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

史海

第拾九卷目次

◎藤原良房……田口卯吉君

良房か始めて太政大臣となり、且始めて攝政となりしとは藤原氏專權の濫觴として從來史家之を責むと雖も良房必ずしも此の如き人物ならず

◎ラ、フェイエット……宮本潮來君

是れ歐米二大陸の巨人の傳なり詳且密、人をて轉々佛米二大革命の內に入るの思あらしむ

◎貝原益軒……足立栗園君

筆法嚴肅、雜言なし、此記者豈に益軒第二世ならざるを得んや、君子の人か君子の人なり

◎明石孫太郎著新體支那歷史…對…田口卯吉著支那開化小史の判決に就て…田口卯吉君

文學界の剽切は法律に因りて制裁を加ふべからざれは社會上の制裁に依賴せざるべからず、是れ此篇を揭くる所以なり

◎太平記は小說か非なるか　鈴木成章君

太平記は現今一大問題の書なり、其一大問題たる所以は之を讀みて知るべし

批評欄內相變らず騷然たり◎插畫持國天

（定價）一冊金九錢。十冊前金七十五錢。市外は一冊に付郵稅一錢增◉每月一回發兌

發行所　東京京橋區彌左衛門町　經濟雜誌社

大取次　東京○東京堂、巖々堂、東海堂●大坂○岡島新聞舖●京都○便利堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

通信女學講義錄買入廣告

明治廿三年弊社發兌の、通信女學講義錄、第〇〇十號、明治廿四年、同廿五年發兌の、通信女學講義錄、第〇九號は、自今賣切欠號に相成居候處、同號購讀の切望者出で、其懇望に默し難く、因て右同號の講義錄御持合せの御方にして、若し讓り受ると出來候へば、一冊金三十貳錢の定價なるを、金壹圓にて讓り請くべく候間、弊社へ御一報被下度候、猶亦御便宜によ り壹冊金壹圓の割合にて、弊社發兌の雜誌、亦は書籍の內にて交換申し上るもよろしく候、此段廣告仕候也

二月八日

女學雜誌社

横山男君著

婚姻論

洋綴小本　二百三拾九頁
特別賣價　金拾六錢
郵便稅　金四錢

目次

(一)總論○(二)婚姻の定則○(三)婚姻は人類の天性○(四)婚姻の效力○(五)婚姻數は社會の盛衰によりて增減す○(六)早婚上○(七)早婚中○(八)早婚下○(九)晩婚○(十)私婚上○(十一)私婚下○(十二)血族婚上○(十三)血族婚下○(十四)濫婚上○(十五)濫婚下○(十六)離婚上○(十七)離婚中○(十八)離婚下○(十九正婚○(二十)結婚年齡○(廿一)結婚年齡の差○(廿二)男女共諸法上○(廿三)男女共諸法中○(廿四)男女共諸法下○(廿五)男女互に撰ふ事○(廿六)結婚の境界○(廿七)離婚○(廿八)結論○目次終

東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

新年の贈物

は面白き勸懲繪草紙にして第一小供にも分り易く大人にも敎へとなるべき意味ある書物なれば土産贈物としては無類のものに候

定價一冊五錢
郵送料二錢

鈴木弘恭大人著（半紙判日本綴）

再版 增補

文法口授　一名和文獨案內

特別賣價　金拾二錢　郵便稅　金二錢

目錄

(一) 文と云ものゝ譯
(二) 章句段節の譯
(三) 文を作るは容易なる譯
(四) 多く文を作るを善とする譯
(五) 文を作る工夫の事
(六) 草稿の譯幷に書方
(七) 文を練磨する事
(八) 文を作るに病癖ある事
(九) 佳篇を作る法
(十) 文を培養する法
(十一) 種々の文例

東京下六番町

女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下
明宮殿下 御覽濟の書

巖本善治妻譯

再版 小公子

（リツトル。ロード。フオントルロイ）

小供のよみ本

新教育 時田愛次郎君の批評

巖本善治氏の妻女が譯述する所にして、卷首は茫々として物足らぬ心地せる、も、讀み去り讀み來りて五十一頁に至り、代言人の言を見る頃は、實にこの眞情を露出して、親く目に之れを見るが如き思ひあり、セドリックが無邪氣なる談話中、自ら風教の意味を寓し、讀者をして、覺えず絶叫せしむ、近來稀有の珍書也。

定價金三拾八錢の所今回**新年**の贈物として**特別金廿八錢**（郵税金八錢）に引下候間續々購求被下度候

賣捌所
東京◉東海堂、巖々堂、東京堂、武藏屋、警醒社、京都◉便利堂、東枝律、大坂◉岡島、梅原、神戸◉福音社、熊本◉草野、函館◉福音舍

父 **井上藤平** 事去七日午後發病腦卒中にて養生不相叶八日午後八時十分永眠致候に付來十一日午後二時下谷徒士町三丁目基督教會堂にて送葬式執行仕候間右同人生前の辱知諸君に御報仕候也

但シ造花生花等恵贈の儀は一切固謝仕候

井上藤太郎　太田壽之祐
巖本善治　木村駿吉

女學雜誌社出版書

子供のはなし 全

定價金五錢
郵税金貳錢

目次

第壹回 田舍音樂師
第貳回 菫の君
第三回 熊と旅人
第四回 風と日の喧嘩
第五回 ハイ／＼トタヾイマ
第六回 カンとクツドの話
第七回 王にも勝てる人々
第八回 母の愛
第九回 柔順なる娘
第十回 英雄の所業

東京下六番町
女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○……………建築師廣告……………○

建築師伊藤爲吉發明　農商務省特許

地震暴風水害安全家屋

右ハ地震暴風出水ノ三害ニ耐ユヘキ家屋ナリ特許ヲ得タルハ構造ニアリ廣ク世人ノ實行ヲ望ム

建築師伊藤爲吉發明　發明者製造ヲ監督ス

地震暴風安全建築鐵具

右ハ濃尾大震ノ後簡便ヲ主トシテ工風セリ。些少ノ資金ヲ投ズレバ安全ナル家屋ニ住居スルヲ得。

建築師伊藤爲吉著述　實價五拾錢　郵税四錢

日本建築構造改良法　全

本書ハ日本家屋ニ安住スルノ危キヲ示シ。改良家屋ノ耐震構造ナルヲ説キ。家屋造營主ノ便ニ供ス。

教會學校病院公館居宅

造家建築一切ノ計畫監督及ビ工事ノ相談ニ應ジ。又如何ナル小工事タルモ善良ナル職工ヲ紹介ス。

東京神田區三崎町三丁目壹番地

米國建築師

伊藤爲吉事務所

護教社移轉廣告

今回京橋區竹川町九番地より左記の所へ移轉す以后通信注文其他一切の郵書等同所へ御發送被下度候

東京赤坂區仲の町二番地

山路彌吉方

一雜誌及び書籍代金二十錢未滿は郵券代用不苦候、郵券は五厘切手一割増の事
一雜誌及び書籍代金通運便にて御送付の向は屆け賃さも濟にして御送付相成度候

女學雜誌代價

○白赤双方合せ購讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊(半年)	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊(一年)	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方購讀の分

六冊	前金	三十五錢	府外	三十八錢
十三冊(半年)	同	七十三錢	同	七十八錢
廿六冊(一年)	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢
一冊	金六錢	郵税	金五厘	

廣告料及無料廣告

一行	一回	(廿七字詰)	前金拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲くるものにて一切無料さす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增さ定む。

東京市麹町區下六番町六番地

發行所　女學雜誌社

編輯兼發行人　嚴本善治

印刷人　堀口庄三